

『エラゴン 遺志を継ぐ者』を読む

—主人公のゆくえ—

遠藤 祐

『エラゴン 遺志を継ぐ者』は、「嬉しいことに、本作は三部作の第一部だ」と「訳者あとがき」にあるように、『ドラゴンライダー』シリーズの最初の一巻で、原題は「ERAGON: INHERITANCE」。大鳥双恵おおしまふたえの邦訳は六四三ページに及ぶ大冊(ソニー・マガジンス、二〇〇四・四)だが、作者クリストファー・パオリーニは「現在二〇歳、イエローストーン国立公園にほど近いモンタナの雄大な自然のなかに、二歳年下の妹と両親とともに暮らしている。一五歳で高校を卒業後、この物語を書きあげた」「(訳者あとがき)という。驚嘆すべき想像力と旺盛な筆力の持ち主といわなければならぬ。人界とドワーフの国との双方にわたる物語空間に、ドラゴンの存在をめぐって長く複雑な歴史的因縁を背負う人間族とドワーフ族とエルフ族とに、ドラゴンひとりも加わって、闇の種族、〈悪〉の化身である怪物たちとの間に数々のドラマを繰りひろげる状況を伝える長大なファンタジーを構想し、整然と跡付けていく能力は、たしかに注目に価しよう。そういう若い物語作家がおのれの物語空間に送りだした主人公エラゴンは、アラゲイジア帝国の北東部に南北に連なるスパイン山脈の山あいの村カーヴァホールに生まれた少年で、物心ついたときにはすでに両親がおらず、村の中心部から少し離れた伯父ギャロウの家に、二歳年長の従兄ロー

ランと育つ。伯父も早く妻を失い、エラゴンも父が誰かを知らず、母の名はセリーナであると聞くが、彼女の行方はまったくわからない。出生の謎をひめた少年の、物語のはこびがあかす不思議な力を思うと、父母は何ものであったかが、大いに気になるけれども、その「秘密」は「訳者あとがき」によれば、「Eldrest」と題された第二部に明らかにされる予定であるようだ。〈長男〉とあるからには、エラゴンの見知らぬ弟妹たちもいるのだろうか。物語の最後の最後に至って、読者はみな、(二巻につづく)と附記されたその先を、早く読みたいと思うに違いない。でもいまは『エラゴン 遺志を継ぐ者』に立ち帰って、物語の終わりで主人公が、「いくらかの安らぎと充足感じゆうそくかん」に「心をやさしく包」まれながら、「ぼくはかならず行く」とみずからに確約するに至った次第をつきとめてみることに、わたしに与えられた課題であるだろう。エラゴンははたしてどこへ、誰の許へ「かならず行く」というのだろうか。物語を一読してわたしが強く心を惹かれるのは、最終章でのエラゴンの体験なのだが、その意味を的確にとらえるためには、それまでの彼の道行きをの紆余曲折に、眼を凝らさなければならぬのである。

『エラゴン 遺志を継ぐ者』（以下『エラゴン』と略称）の年代がいつかは、現実の曆に即して特定することができない。物語のどこにも想定を許す標識は求められないのだ。したがって、年代は現実とはまったくかわらない物語内のそれで、アラゲイシアの曆における現代と、みるべきなだろう。その現代でエラゴンの十五歳になった年のでき事から流れはじめた物語の時間は、全体の三分の二が過ぎたところで彼の「十六歳の誕生日」を迎えた（「39ギリエド」）あと、なおしばらくは流れていく。誕生日のエラゴンは、「荒れ野をわたる道中」に在ると語られて、カーヴァホールを離れているのがわかる。こうして、『エラゴン』のはじめから終わりまでには、およそ一年ないし一年半ほどの歳月が経過するとみられるが、作者は物語の時間の推移に、さほど意識的ではないようだ。それよりも、「02パラーカー谷」「16セリンスフォード」や、さきほどの「39ギリエド」など、章の見出しに地名が少なくないところに注意すると、『エラゴン』は、主人公がどこにどのようなようにして動き、それぞれの場所ではいかなるでき事に出遭ったかに関心を寄せる〈空間の物語〉、換言すれば、生まれ故郷を出てアラゲイシアの各地を遍歴するエラゴンの〈旅の物語〉と受け留めることができよう。もちろんその旅は、漫然たる観光旅行でもないし、呑気な放浪の旅でもない。それはひとつの使命を帯びたきびしい旅であり、使命とは、支配欲にとりつかれたアラゲイシアの王ガルバトリックスの暴虐と、それに加担する〈悪〉の化身たちの非道な殺戮とから、全世界の民の生命を救いだす——という任務にはかならない。旅の道のりは、使命を果

たすにふさわしいものと成るために少年に与えられた修行の過程なのである。どうしてもおらなければならぬ〈道〉、だから先へ進むはかばかしい。旅の途上で幾度かカーヴァホールの日々を懐かしく思いだしてみても、そこへ引き帰すことは、エラゴンに許されてはいないのである。

〈旅の物語〉の語りは、その性格からいって、次の三部に分かれるのが、普通だろう——主人公の旅に出るまでの情況がまず語られ、ついで旅のあいだのもろもろの体験がたどられて、終わりに目的地の地へ着いた主人公はいかなるなりゆきを迎えたかが告げられる、という具合に。『エラゴン』の五十九の章もその例に洩れず、I故郷カーヴァホールでのエラゴン「01発見」→「15サフィラの鞍」と、II旅のエラゴン「16セリンスフォード」→「49板ばさみ」と、III目的地の地ファーザン・ドゥアーでのエラゴン「50答えをもとめて」→「59嘆きの賢者」の在り様が、おのおのの部に語られているのである。だがそれだけではない。『エラゴン』は、「01」以降の物語に先立つ、ひとつの章をもつ。見出しは「00恐怖の影」。その章数の表示が興味深い。「00」は、歴史的には有史以前といったところか。物語そのものはまだはじまらないけれども、そこに語られたでき事はあとに繋がって、物語を導く前提にはかならないことを、それは意味しているだろう。その意味で、『エラゴン』の序章あるいは「エラゴンの物語」の始源の章ともいべき冒頭に示されるのは、アーガルたちをひきいた〈悪〉のシェイドによるエルフの女性襲撃事件である。ちなみにアーガルもシェイドも固有名詞ではない。のちに登場するラーザックを含めて「闇」の生物」の種類であって、シェイドは名のごとく〈暗影〉すなわち「この国にはびこるもっとも邪悪で狡猾な悪魔」、「シェイドを殺すには、心臓をつきさすしかないんだ。それ以外では、いったん消滅はしても、またどこかで靈魂

となつて現れる」(「52アジハド」と説明される、恐るべき敵なのである。

序章の場面は夜の闇に包まれた深い森、その木かげに身をひそめたシェイドらの前に、白馬にのつた三人のエルフがけもの道を近づいてくる。護衛の男たちには生まれた女性のエルフは、ひざに置いた「巾着」をしきりに注意している。何か大切なものが収めてあるらしい。一行が眼の前を通り過ぎた瞬間、襲いかかった討手は、護衛をたおして、馬をとり木立のなかへのがれた女性を追ひ詰め、道に戻った彼女を、シェイドの放った火とともに取り囲む。「捕らえろ」とシェイドがアーガルに命じたときに起きたことを、語りについでみておこう——「女エルフは巾着をあけ、なかに手を入れた。巾着がするりと地面に落ちる。手に残ったのは、大きなサファイアブルーの石だ。表面に、荒れくるう炎の光が反射している。エルフは石を頭上にさしあげた。唇が、とりつかれたようになにかの文句をとなえはじめる。シェイドが必死の形相でさげんだ。「ガーシラー！」／＼シェイドの掌から赤い火の玉がふき出し、矢のような速さでエルフに飛びかかった。が、一瞬遅かった。森じゅうがぱつとエメラルド色の光に照らされ、次の瞬間、石は忽然と消えていた。赤い火はそのままエルフにつきささり、彼女はばたりとたおれた」。

そのあと怒ったシェイドが意識を失ったエルフを鞍に寄せ、自分も騎乗して歩み去るところで終わりを告げる冒頭は、さまざまの疑問を読者の裡にのこす。シェイドはどこへ行くのか。連れ去られたエルフの身柄はどうなるのか、そもそもこの女性はどうしてサファイア様の「石」を携え、旅をしたのか……などなど、それらにはいずれ物語本体が答えるはずで、だからこそ冒頭は序章とするにふさわしい、といえよう。しかもそこには、なお読者の強い関心を呼びます問題が、のこっている。エルフが身の安

全をすててまで守ろうとした「石」とは何か、「忽然と消え」たそれはどうなつたか。その問いを受けて、物語はただちに「01発見」で行方を示すとともに、「04授かり物」で正体を明かすのである。

少年エラゴンは「カーヴァホール周辺ではいちばんの狩人」。獲物を求めてスパイン山地に分け入り、三日目の晩に眠る鹿の群れを見つけて、矢を射ようとしたその時、「夜の闇を、なにかの爆発音がつんざいた」という。逃げた鹿たちを追って草地にとびだしたエラゴンがふりかえってみると、「ちょうどシカたちがいたあたり」の草や樹が「大きな円を描くように」「黒く焦げていて、その「真ん中に、つるりとした青い石がころがって」いた、という。「おそろおそろ」近づいて、拾いあげたそれ、「濃い青色の表面にはキズひとつなく、静脈状の白い筋がクモの巣のように走っている。ひんやりとして、絹をかたくしたかのような、なめらかな感触。三センチほどの卵型で、重さは二、三キロ」と形状の説明される「石」。その衝撃的な不意の出現は序章の事件に呼応することを、ファンタジーの愛読者ならすぐ納得するはずだ。シェイドに襲われたエルフが「大きなサファイアブルーの石」を掲げて呪文を唱え、森に緑青の光の輝いたとき、はらかな時空を超えて、瞬時のうちに、それは少年の許にへ移動したのである。のちに明らかにされるように、序章の場面はエルフの秘境にある「ドゥ・ウェルデンヴァーデン」の深林(「52アジハド」)の一角で、訳書『エラゴン』のカバーの裏に印刷された物語空間の地図によると、スパイン山脈からはかなり離れた東方の地点、エラゴンと鹿たちのいた「草地」とのあいだの距離を実測できないけれども、歩いたら数週間はかかるかと思われる。それほどへだたつたふたつの場所を瞬時に移動するのは、エラゴンも推測するように、「これは魔法と関係があること」、すなわちエルフ

の魔力がもたらした〈瞬間移動〉の結果にはかならない。

ならば、「青い石」はどうしてエラゴンのすぐ近くに現われたのだろうか？それは、たんなる偶然か何かの間違いか、あるいは彼のところに「送られてきたのだろうか？」。これも物語がのちに明かすこと（52アジハド）だが、エルフは「石」を、〈悪〉の手から守るために、旧知の「プロムのことを思い出し」て、彼のいるカーヴァホールに「送った」のだ、という。しかし危急の際だったので技に多少の狂いが生じて、スパイン山脈の森に届いたのだ、という。すると、エラゴンが「石」を手にしたのは偶然か間違いないことになるが、そうなのか。技の狂いが原因のすべてなら、「石」は目的地の近辺のどこに着いてもよかつたはずだ。にもかかわらずエラゴンのいる場所に〈移動〉したのだから、やはり彼の許にきたとみるべきだろう。ただエルフは少年の存在を知らないゆえ、彼を目標に選んだのは、ほかならぬ「石」そのもの、とするほかはない。両者は物語のはじまる以前から、眼に見えぬ因縁の糸で結ばれていたのである。そこに『エラゴン』の成立する〈第一原因〉が在り、出会うべきものが出会うところから、物語は具体的に動きだすのである。

2

不思議な「石」の正体は何か——その告げられるまでの第I部の過程に、本来の受け手であったプロム、村の「年老いた語り部」が姿を現わす。「エラゴンの友だち」でもあるプロムは、カーヴァホールの「旅商人たちの夜営する空き地」に集まった人びとを前に、エラゴンの上に視線を据えつつ、昔語りをはじめた。それは「ドラゴンライダー族」、すなわち

「ドラゴン乗りの徒」を裏切ったガルバトリックスと十三人の〈裏切り者たち〉の物語で、聴き終えて強く心を動かされつつ帰宅したエラゴンの身に、ひき続き驚くべき事の生じる点に注意したい。「カーヴァホールからもどつた日の晩」、真夜中に柵においた「石」が「甲高い音」を発し、「ガタガタと」動き、床に落ちてころがってくると、エラゴンの眼前で割れはじめたのだ。「とつじょ」表面にひびが走り、「てっぺん」の一部が欠けて、「生き物」が這いだしてきた、という。「生き物」は「ドラゴンだった」とあって、「石」の正体も判明するわけだが、「03ドラゴンライダー」から「04授かり物」にかけて、主人公の前に連続して生じる、プロムの登場と「青い石」とみえた卵からのドラゴンの誕生とは、物語のはこびに大きな意味をもつ。プロムもドラゴンも、以後のエラゴンのなりゆきに密接にかかわる存在であって、だからほぼ同時に物語空間に現われるのである。エラゴンが旅に出るまでを語る第I部のあとの十一の章に、三者の互いに近づく次第が示されるが、その前に気になる個所をひとつみておこう。

「03」の章のはじめ、「わが家」に帰着したエラゴンが翌朝、「今日は特別な日だ」と思うところに、自身の出自にまつわるエピソードが、「十六年前の今日、ほぼこの時間、母親のセリーナが身重の身体で、カーヴァホールにひとり舞いもどってきたのだ。六年間、遠い町で暮らした末のことだった。もどってきたとき、彼女は高価な衣装をまとい、真珠をちりばめたネットで髪をゆわえていた。赤んぼうが生まれるまでここに置いてほしいと、兄のギャロウをたよって来たのだ。五か月後、男の子が生まれた」と、そしてセリーナは子供を育ててほしいと兄夫婦に哀願し「息子をエラゴンと名づけ、翌朝早く家を出て、二度ともどつてこなかった」と、紹介され

ている。亡き伯母の遺したこの話によって、エラゴンは裡に哀しみの翳を宿し、そこにいかなる「事情」が込められていたのかを知りたいとの願望を抱く。読者も「それがなんなのか、わかればいいのに」と思うけれども、誰にもわからない。ただ、物語のなかにはその秘密を識るものがひとりだけいる、と思われる。「物語を語るだけのみすぼらしい老人」とみえるプロムがそれで、旅に出てから、彼はエラゴンの問いに答えて、セリーナのことを「つねに威厳と誇りを失わない人だった。ギャロウと同じようにな。結局、そのせいで、彼女はつまずいてしまったのだが、しかし同時に、それが彼女の偉大なる資質でもあった……たとえ自分がどんな身に置かれても、貧しい者や不幸な者たちをけんめいに助けようとしていた」と語り、しみじみと「いなくなったとき、さびしく思うくらいにな」と言う（29失敗）のだから。そのことを思い合わせると、この語り部は、たんなる「友だち」以上の、エラゴンにとって身近な存在ではなかったか、と疑われてくる。

同時に、エラゴンの抱える「もうひとつ」の問題、「父親はだれなのか？セリーナはそれをけっして明かさなかったし、父親であるはずの人がエラゴンを訪ねてきたこともない。名前だけでもいいから、父親のことを知りたかった」というそれにも、プロムはかかわっているのかもしれない。彼が「カーヴァホールに家を買ってうつり住んだ」のはいまから「十五年近く前」であったという（06プロム、歴史を語る）。するとそれは、エラゴン誕生の少しあとのことにはかならない、とわかる。プロムは隠棲の地を求めてカーヴァホールに来たのではあるまい。居を定めて「以来ずっと、この村で静かに暮らして」今日に至った彼は、幼な児の無事な成長を見守るために、村に移り住んだのに違いない。しかも老人は、「おや、おまえ

さん、自分の名前の由来を知らなかったのか？」「ならば、おまえにとっちゃ、よけいに興味のある話だわのう」と言って、「エラゴンという名のエルフ」、ドラゴンの卵をみつけ、生まれた幼獣をビッドダムと名づけて育て、「初代ドラゴンライダー」となって、対立するエルフ族とドラゴンたちの調停をはかり、長く続いた戦争を終結させた人物の事蹟を、少年に告げている。

そういう老人、少年の名前の由来を識り、かげで見守り、その質問に答え、みずからも進んで必要な知識を授けるプロムは、ただの語り部ではなく、エラゴンの後見人、あるいは「親がわり」の人物とみて、差し支えあるまい。だからこそ彼は、旅に出るといふエラゴンの決意を耳にしたとき、「たぶん、助けはいらんとはねつけられるんだろうが」「なんといわれようと、わしはついていくぞ。おまえさんのようなひよっ子が、ドラゴンを連れてうるつきまわるというんではのう」（14名剣サーロック、傍点引用者）といわざるをえないのだ。傍点の個所に、「ひよっ子」、すなわちすべてにまだ熟さぬものを放っておくわけにはいかない、との心情の動くのが、認められよう。こうして少年と行をともしることになったプロムは、旅に出る直前「ここでおまえを助けようとしている者だ」（同前）と、自己の「真実」のひとつを告げたのに続いて、旅の日々に、すぐれた剣士であるおのれを、力ある魔術師でもあるおのれを直接少年の前に示して、彼を鍛え、導き、「ひよっ子」を一人前の確かな人物に育てていく。

のみならず、旅程のなかばにも達しないとき、闇の刺客の短剣にさされて倒れたプロムは、死に臨んでわが身の大きな秘密をエラゴンに明かす。右手を「ブドウ酒」で洗うように促されたエラゴンが、そうすると、掌に現われたのは「ゲドウェイ・イグナシア——光る掌」、紛れもないドラゴ

ンライダーの標識である銀に輝く傷痕、「若いころ……今のおまえよりもっと若い時分に選ばれた……ライダーになれとな。修行中、べつの見習いと仲良くなった……それがモーザンじゃった」「やつはその後、仲間たちを裏切り、ガルバトリックス側に寝返ったのだ……ウローエンガードの町、ドル・アリーバで、わしの若いドラゴンは殺された。彼女の名は……サフ、イラ（傍点引用者）と、苦しい息のもとに語り、ガルバトリックスとその一味への激しい憎しみ、彼らとの戦いを続けられない無念さを告げ、祝福の言葉「願わくば、来る歳月が汝の身に大いなる幸をもたらさんことを」と、「古代の七つの言葉」とその意味を、エラゴンに遺して、彼の世に旅立つ。そのプロムの臨終の「目がエラゴンをしっかりと見すえ」「その顔にはおだやかな表情がひろがっていた」「37ライダーの遺産」という。なぜか。眼の前の少年におのれの身代わり、自身の《遺志を継ぐ者》をはっきりと認めることができたからに違いない。エラゴンも、深い「喪失感」を抱きながらも、プロムの《遺志と遺産》をしっかりと受け継ぎ、なきがらを埋葬した岩に、「ドラゴンライダー・プロム、ここに眠る／わが父ともいえる男／彼の名が栄光のもとに生き続けんことを」と刻んだのである。その墓碑銘によって、プロムはエラゴンとともに物語に生き続けるだろう。そうであっても、読者としては、選ばれたのがどうしてエラゴンだったのかを、いま一度へ旅に出るまで〳〵の情況に即してみておく必要がある。「青い石」Ⅱ卵からドラゴンが生まれた夜、はじめてそのものに触れたとき、彼の体験したでき事がまず注目されなければならない。「ためらうように右手をさし出し、わき腹に触れてみる。と、氷のように冷たい衝撃が掌におそいかかった。腕のなかを血液が煮えたるような感覚が走りぬける。」「耳の奥で鉄のはじけあう音が響き、怒りに満ちた静かなさけびが

聞こえてくる。全身に焼けつくような痛み。動こうとしても動けない。数時間とも思えるときがすぎ、ようやく四肢に体温がもどってきた。だが、かすかなうずきは残っている（傍点引用者）「おそるおそる目をやると、掌の中央が楕円を描くように、白くちらちらと光っている」と、「05目覚め」の伝える一段。傍点の箇所から知られるように、強い衝撃波を発生したのはドラゴンであって、それは、相手が心の絆を結ぶにふさわしい人間か、どうかを視るために投じられたに違いない。同時にこの最初の触合いで、少年にドラゴンの心の動きが感じとれた点をも、見逃してはなるまい。テストの結果は次の朝に判明する。エラゴンが気がつくと、掌の「ゆうベドラゴンに触れたところが、銀色の光沢を放っている」というそれ、プロムにあったのとおなじ「ゲドウェイ・イグナシア」が印されて、彼もまたドラゴンライダーにはかならぬことが認められたのである。

こうして、「淡青色」の眼と「明るい鮮烈な青」の表皮をもつドラゴンと、やがて「銀の手」とも呼ばれることになる少年とのあいだに結ばれた絆は、森の小丘に立つナナカマドの木の枝に作った小屋でエラゴンが幼獣を育てるあいだに、さらに強固なものとなり、二人の「心のなかの交信は、日を追って増して」いき、ついにドラゴンが少年の名を呼ぶトキがくる。「頭のなかに、太いはっきりとした声が響きわたった。／「エラゴン」／厳粛な誓約の言葉のように、重々しく、悲しげな声だ。ドラゴンに目をやると、腕にひりひりとしたうずきが走る」と語られる「そのとき」は、物語のはこびのうえでかりその時ではない。それは、ドラゴンがみずからライダーたるべき人間に、いつでも、どこでも、何があっても、離れず、ともに生きることを誓ったトキなのだ。その声の真摯な響きとそのひたむきなまなざしとは、エラゴンの心身を直接に打って、彼もまたドラゴンを、

動物ではなく「なにか……なにか、ちがうもの」、すべてを委ね・すべてをひき受けるべき伴侶、絶対の信頼をおける「ぼくのドラゴン」(傍点引用者)として、見いだす。だが相手はまだ名前をもたない。そこで、わが名を呼ばれたエラゴンも、ふさわしい名前を探し出して、ドラゴンに報いなければならぬ。「06」でプロムをたずねたのは、そのためであった。

たくさんの名前を次々と挙げたプロムの、「最後の最後」に「小さな声」でつけ加えたのが「サフィラ」、それが老人の憶い出に鮮やかなドラゴンの名であることをすでにみたけれども、ナナカマドの木の許で「ぼくのドラゴン」の喜んで受け容れたのもそれであるのが、興味深い。「男の名前ばかり」を告げてみな拒否されたエラゴンが、相手は「女なんだ」と気づいて示した「ミレメル」以下も「却下」されたあげく、プロムの最後に口にしたのを思いだして、「おまえはサフィラ?」と問い掛けると、「いかに」という満足げな応答が、「果てしない距離から聞こえる声のように」頭のなかに響いた、という。やはりエラゴンの頭のなかで「なにかがカチツと音を立て」たともあって、このとき、運命の歯車がきっちり噛み合っている、プロムと初代サフィラの《遺志を継ぐ者》としての二人の《一体化》が成就したのである(「07強き者の名前」)。二人のあいだのいきさつのすべてをプロムが見透しているのは、すでにたずねた、エラゴンの《父》に代わる育ての親という在り様を想えば、当然のこととすべきだろう。そのプロムと二代目のサフィラとの最初の出会いの情況に触れておく。

優雅に地上に舞いおりたドラゴンの前に進みだした老人の眼に涙が光り、双方ともしばらく相手をみつめて立ち尽くす。「そうか……」と自身に何ごとかを確かめるようにつぶやく老人、「片方の青い大きな目」で見守るドラゴン。やがて「プロムが、ふいに手をさし出した。サフィラはゆっく

りと頭をたれ、プロムに額をさわらせた。と、大きく鼻を鳴らして飛びのき、エラゴンのうしろへあとずさった」とあって、さらに相手の名前を知ったプロムが、心を込めて「たしかにぴったりじゃ」と言い、「妙な形に手をねじ」って、「よろしくサフィラ。会えて光栄じゃよ」と挨拶すると、「この人、気に入った」とサフィラもエラゴンに伝えた、という。この場面面でプロムの深い感動は疑うべくもない。「光栄」とは真実の思いであり、その畏敬の念をサフィラも素直に受け留め、しかし高ぶることなく、「静かに」プロムをわが身に受け容れたのである。ちなみに、プロムに「額をさわらせた」サフィラがふいにうしろへ飛び退いたのは、老人を嫌ったからではなく、のちになって、彼がライダーであったことは「プロムがわたしの体に触れた瞬間からわかっていた」(「38きらめく墓」とエラゴンに明かすとおりの、その掌に隠された「ゲドウェイ・イグナシア」の所在を感じたためにほかならない。またこれも後刻エラゴンに忠告して、「プロムは魔術師!」)「その力についてよく聞いておきなさい。だが言葉には気をつけること。そういう能力のある人に、いかげんな気持ちでのぞんではいけない」(「19訓戒」と言うのを考慮すると、老人にひそむ大きな魔法の力を感得した驚きも、このとき動いたかと思われる。

こうして、『指輪物語』第一部のタイトルを借りれば、《旅の仲間》が物語に出揃う。サフィラに楽に騎乗できるように鞍を用意して、三人がカーヴァーの野営地をあとしたのは、「身を切るような風」の吹く、曇り空のある朝であった。

論のはじめに見たとおり、物語の第Ⅱ部〈旅のあいだ〉は「16セリンスフォード」から「49板ばさみ」まで、旅程の長さにしたがって、叙述に費される章数も三十四と多い。その間にたどられた旅の経路は、訳書のカバー裏に刷られた物語空間の図にその〈軌跡〉が記されていて、読者の理解を助けてくれるのだが、物語のなかでも「アラゲイシアの地図」がひろげられて、説明が施されているので、参考のために掲げておこう。「地図の左側には、大海が未知なる西方へとひろがっている。海岸ぞいに延々とびるのはスパイン山脈。中央にはハダラク砂漠——東側は白紙のままだ。その空白のどこかに、ヴァーデンたちが身をかくしているのだ。南端にあるサーダは、ライダーが滅びたあと、帝国から分かれた小国だ。サーダ国がひそかにヴァーデンを支援していると、エラゴンは聞いている。／サーダの東境に近いところから、ビオアという名の山脈がつらなっている。この山脈については、いろいろと聞いたことがある。スパインの十倍の高さがあるというが、エラゴンは内心、それはあまりにも誇張にすぎるだろうと思っている。ビオア山脈の東端は、やはり空白だ。」「カーヴァホールはパランカー谷の先に、小さな点のようにのっている。その真横に、平原をばさんでひろがるのがドゥ・ウェルデンヴァーデンの森だ。ビオア山脈と同じく、その東端は地図にない。森の西の一部は開拓されているが、深部は手つかずで未知のまま残っている。スパインよりさらにきびしい野生の森である」（「28侵入」）。

長くなるので、旅の経路とかわからない、西の「大海」と島々に関する

あいだの一段は省略したけれども、以上の語りと物語空間図とを照合すれば、『エラゴン』の版図の広大さは、理合できるはずだ。それにしても説明を多少補う必要があるだろう。東西に「ひろがる」深森地帯はエルフ族の秘境で、そのどこかに中心都市エレズメーラが在って、エラゴンはこの物語の終わったあと、いつの日かそこへ「行く」ことになるらしい。ヴァーデンはガルバトリックスの帝国支配に反抗する反乱軍の組織で、砂漠の「東側」の「空白のどこか」にひそむとされる彼らの根拠地は、ビオア山脈の二峰ファーザン・ドゥアーに在ることを、やがて物語は示す。なお「大海」の北部に浮かぶ「巨大な島」ヴローエンガードが、「ライダーの先祖たちの故郷」で、「かつて栄えたその島は今すっかり荒れはて」、中心の町ドル・アリーバは「廃墟と化し」ていること、だがその町はプロムにとって、ライダーの修行をともにしたモーザンの裏切りのために、「わしの若いドラゴンは殺された」という痛切な苦い記憶ののこる場所であることを、つけ加えておかなばならない。

少年とドラゴンと老人三人の旅に出るきっかけとなったのは、村に「青い石」出現の情報がガルバトリックス側に洩れて、農場が襲われ、恐るべき殺戮と破壊がおこなわれた、というでき事。たまたまその日家にのこっていたギャロウが殺戮の対象となって、全身に火傷をおい、戻ってきたエラゴンに救出されるが、やがて息をひきとる。襲ったものは「黒マントの男たち」、プロムの説明によると、ラーザックと呼ばれる人間の形をとった闇の生物である、という。そう説いたプロムから「どこへ行くつもり」かときかれたエラゴンが、伯父の仇を討つために「黒マントの男たちをつかまえて、殺してやる」と懸命にこたえたところに、旅はなりたつ。だからそれは、ラーザックを追う、エラゴン個人の復讐の旅であるけれども、

敵は帝国の支配権力の手先にほかならぬゆえ、少年はおのずから反ガルバトリックスの側に身をおくことになって、旅はヴァーデンたちの根拠地を目指すに至るのである。

物語で、旅するものは脅威にさらされ、危険に遭遇するのがきまりとなっている。だからラーザックを追うエラゴンたちも、旅のあいだに何度か彼らとその仲間のシェイドやアーガルの襲撃を受けなければならぬ。闇の生物どもの動きは、エラゴンの身の上に少なからぬ影響をもたらす。最初のそれは、ヤーズアックで「惨劇」の痕跡、大量殺戮の死体の山を眼にしたとき。迫ってきた二体のアーガルを前にしたエラゴンの激しい怒りと死への「強烈な嫌悪感」が、ただちに彼自身にもひそむ魔法の力を作動させて、「無意識のうちに」古代語の呪文をとえつつ、魔力を帯びた矢で相手を倒す。すぐあとで「ぼくは——パランカー谷の農場の子エラゴンは——魔法を使った。そう、魔法だ！ あそこで起こったことを説明するには、この言葉しかない。信じられないことだが、この目で見たものは否定できない。どうしたわけか、ぼくは魔術師か魔法使いになってしまったんだ！ しかし、この新しい力をどうすればもう一度使えるのか、どれほどの力が、またどんな危険があるのか、さっぱりわからない。なぜこんな力がついたんだらう？」（19訓戒）と、おのれを省みるけれども、「嫌悪感」は死に反発する強力な生命本能の発動を示すゆえ、それが本来身に備わる力を自己防衛のために呼びさすのは、ごく自然の動きとみられよう。したがってそれは、真実の自己を見いだすエラゴンの〈旅〉の第一歩と認められてよい。いや、すでにサフィラとの出会いによって、ライダーとしての自覚をえたのだから、精確には第二步というべきだろう。

ヤーズアックからダレットを経て港灣都市ティールムに至り、しばらく

滞在したのち、そこを離れた日の夜、一行はまたアーガルに遭遇する。追ってきたのは十二体の「醜い野獣たち」。闘争本能に火のついたエラゴンは、無謀にもサフィラに命じて彼らの前にとび下りて、その動きを阻止すると、首領とおぼしき一体の「ご主人さまがおまえと話したがつてい」との言葉を、「とにかく、申し出は受けられない」とにべもなく切り棄て、「ジェルダ！」と叫んで、おのれの体力に余る魔法の技を行使して、十二体のアーガルを「宙にもちあげて投げ飛ばす」。無謀な行動に出たツケは大きく、彼は、意識を失ったまま二日間動けなくなるのだ。しかも気がついたあとで、ことの次第を知ったプロムから「わしは今までおまえに、ものごとのやり方は教えてきた。しかし、いつやるべきかは教えなかった。

それを見きわめるには思慮深さが必要だ——あきらかに、おまえには欠如しとるものだな」（傍点原文）とズバリ短所を指摘されるばかりか、「おめでどう！ おまえはアラゲイジアでもっとも強大な勢力のひとつと、晴れて敵どうしになったわけじゃ」と、痛烈な皮肉をとばされる始末（30映りしもの）。少年にとってその言葉は、たしかに苦い。しかし諺に「良薬は口に苦し」とあるとおり、エラゴンはそれらの苦言をしっかりと心に収めて、賢明で勇敢な人間に成長するための〈良薬〉とするに違いない。

ここでひとつ気になるのは、アーガルを操る「ご主人さま」、プロムも気がかりだという「親玉」とは誰なのか——だ。物語のはこびから、序章でエルフたちを襲った「深紅の髪とえび茶の目」をもつ人間の姿をした悪霊シェイドかとも思われるけれども、「おまえはアラゲイジアでもっとも強大な勢力のひとつと、晴れて敵どうしになったわけじゃ」というプロムのエラゴンへの注意があるし、のちにエラゴン自身も「あれは王のことだったんだ！」と顧みているのを参照すれば、「ご主人さま」の正体は、や

はりガルバトリックスと見做されよう。いまひとつ、ティールムから湖畔の町ドラス・レオナに移った旅の一行を待ち受けるなりゆきに触れておく必要がある。なぜならそのおかげで、エラゴンの身に大きな変化が生じたからだ。町の「大聖堂」、プロムによればいまわしい邪教の建物でラーザックたちに姿を見られたエラゴンがプロムに急を告げ、ただちに町を脱出して郊外に野営した三人を、夜の闇に乗じてラーザックが襲い、捕縛するという事態。それが、新たな人物マータグの登場を促し、プロムの死をもたらずに、注意したい。

完全に窮地に陥ったエラゴンとプロムの状況を伝える「35報復」の終わりの語りは、「そのとき」ふいに矢が飛んできて、プロムののどに短剣を擬したラーザックを倒したと、次々と飛来する矢の雨に他のものどもが浮足立ったこと、逃げぎわにひとりがエラゴンの脇腹を「けりつけ」、もうひとりが短剣を拾って「投げつけ」たことを告げ、そして言う——「と、プロムの目に異様な光が燃えた。彼はエラゴンの前に身を投げ出し、口をかついて声にならないうなりをあげた。飛んできた短剣が鈍い音を立ててつきささり、プロムは肩からズシンとたおれた。頭が力なく地面に落ちた」と。プロムのこの行動は瞭らかに、しようと思っただけのもの、エラゴンの危機を見て取って、彼を救うために身を挺する在り様に、聖句の影が射すことを、わたしは想わずにいられない。「ヨハネによる福音書」第一五章一三節、《友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない》。誕生以来その成長をずっと見守り続けてきた《父》なるプロムの、エラゴンに寄せる《大きな愛》を、そこに認めていいのではないか。

「37ライダーの遺産」の伝える、短剣の怪我が致命傷となったプロムの死を迎える次第は、先にみたところだが、その死は、ティールムに足を留

めていたあいだに、それとなくエラゴンに予告されていたことも、見逃してはなるまい。「26魔女とネコ」に、プロムが情報収集の仕事に忙しい一日、町を見物して一軒の薬草店に好奇心にかられて入ったエラゴンが、「魔法のネコ」ソレムバンと暮らす「薬草師」で「占い師」でもあるアンジェラから受けた運勢占いのなかに、「恐ろしく不吉なもの。悲しい運命」が待っていて、「そのひとつは死——あつという間に訪れ、あなたにはかり知れない悲しみをもたらす」という言葉のあったのが、憶い合わされよう。現にエラゴン自身も、プロムを葬った翌朝「やっぱり魔女のアンジェラがいつていたことは本当だったんだ」「38きらめく墓」と、予言の確かさを噛みしめている。

それゆえ未来を読んだ他の言葉の示すところ、(A)「あなたの未来には、果てしない歳月が待ち受けているということ」(B)「まわりには熾烈な戦いが巻き起こっている。あなたのために戦っている者もいる。(＊中略)あなたの未来にはいく通りもの可能性がある——どれもこれも血と争いに満ちたものばかりだけど、ただひとつだけ、幸せと平和をもたらすものがある」(C)「あなたはこの国を永遠に去る運命になっている。どこへ流れていくかは知らないけれど、二度とアラゲイシアの地に立つことはない。これはのがれられない運命よ」(D)「あなたの未来には、叙事詩に残るような壮大なロマンスが待っている。(＊中略)帝国が滅びても失せないほど激しい恋よ。ただし、結果が幸せかどうかは定かではない。あなたの愛する人は、先祖代々続く高貴な生まれの人。比類なき強さと、賢さと、美しさをもった人だわ」等々も、エラゴンの身にいずれ具現するに違いない。とりわけ(C)は、はるかに『エラゴン』の最終のなりゆきと呼応する《読み》として、読者に記憶されるべき言葉であって、しかも(D)とともに、

『エラゴン』続篇の在り様にかかわる予告でもある点が、興味深い。なかにはアンジェラの認めるように、すでに具現したエラゴンをめぐる「熾烈な戦い」があつて、マータグの登場は、そのプロセスの上に「あんたのために戦っている者もいる」という「占い師」の「読み」が事実となつて現われたひとつの場合——と認められよう。かくてティールムの「薬草師」の店における「魔女とネコ」と主人公の出会い、偶然と見えて、実は物語の方向性を定める、不可欠のでき事であつた。ちなみに、アンジェラもソレムバンも一過性の登場人物ではなく、出会い以降エラゴンを支えて物語に参加する存在であることも、記憶されていい。

ドラス・レオナの郊外で一行の急を救つたマータグ、「おだやかだが自信に満ちた雰囲気」をただよわせている、エラゴンより「二、三歳年上」の、なぜ助けたかと訊かれて「ラーザックを追っているのはきみみらだけじゃない。やつらはぼくの敵でもある」と答える、「茶色の巻き毛」の若者は、いったい誰なのか。プロムの埋葬された翌朝丘に近い洞窟でエラゴンと交わした会話とその表情の動き（「38きらめく墓」）に注意しよう。墓の主が「あのプロム」、ドラゴンの卵をさがし、「最後の戦いでモーザンを殺した男」かどうかをたずね、確認されると、なぜか顔一面に「当惑の表情を浮かべるマータグ、しかも「ふつうの人間が知らない」はずのプロムの前身を知っているこの若者とは誰か。それだけではない、「ぼくはヴァーデンでもないし、帝国側の人間でもない。だれに身をささげるのでもなく、自分だけで生きている」と言明し、おのれの裡を他者の介入から完全に遮断している、独立独行、いわば一匹狼のマータグはしかし、エラゴンがプロムからゆずられた名剣ザーロックに関心を示し、その紋章を見つめて「顔をくもらせた」のち、いささか興奮気味に「この剣は——（*中略）

その持ち主とともに、広く名を知られていた。前の持ち主だったライダーはモーザン——残忍で血も涙もない男。きみは帝国を憎んでいるといった。なのに、〈裏切り者〉の忌まわしい剣をもっているのはなぜなんだ！と、その由来を語って、逆にエラゴンを問い詰めるのだ。エラゴンが正直に事情を話して緊張の瞬間はすぎ去るけれども、プロムとモーザンとそしてザーロックのことまでも知っているマータグとは何者だろうと、主人公同様読者も不思議に思う。

朝食をとつたあとで、ラーザックに蹴りつけられたエラゴンの身を気づかうマータグが、言う——「きみは魔法で身を守るかもしれないが、ものもちあげたり剣を使つたりするには、旅の仲間が必要だろう。しばらくのあいだ、ぼくをその仲間にしてくれないか」（傍点引用者）。彼の申し出を「感謝」とともにエラゴンが受け入れたところで、新たな旅の一行が編成されるわけだが、それは、プロムの死を機とするマータグと老人の〈入れ換え〉というカタチをとる点に、注意しておく。もしプロムが死ななかつたら、若者はそうは言わず、そつと離れていったに違いない。同時に、傍点の言によつて、マータグには最後までエラゴンやサフィラと行をとともにするつもりのないことが、わかる。しかし〈入れ換え〉は物語自体の要請であつて、登場人物の意志を超えて働く。それゆえマータグは、「旅の仲間」に加わつた時点で、サフィラの魔力で「光り輝く宝石の棺」となり、「その円蓋の下にプロムの顔がきれいに透けて見え」るへきらめく墓をあとに、北上してギリエドにおもむき、ラムア川沿いに南下してハダラク砂漠の西の果てに至り、砂の海を渡つてピオア山脈のなかのファザーン・ドゥアーを指す、残りの旅の全行程を、エラゴン・サフィラと歩むべく、すでに運命づけられたのである。だからこそ〈旅の仲間〉の

ひとりとなったわけで、「しばらくのあいだ」と意識する彼を、物語の
が手放さなかった、と言っている。

4

後半の旅の日々に、「共通の話題」の多いエラゴンとマータグとは、相
互に近づいていく。エラゴンは「帝国内の権力争いや政まつりごとにくわしい」マー
タグの話を注意深く聴き、マータグはエラゴンの「魔法の練習」を興味深
く見守り、ときに古代語の意味をたずねるようになる一方、剣の打ちあい
で、どちらも互格の腕をもつすぐれた剣士であることを認め合う、という
情況。双方が、というより物語のはこびに即していえばマータグの方がお
のれの過去に触れるのを避けるところに、問題はのこるとしても、へ旅の
仲間としての連帯感はいつか、秘められた心の壁を打ち砕いて、真実の
明かされるトキがくるだろう。それまでに注目されているのは、すでにエ
ラゴンの「選択しなければならぬ」としたら、ぼくはヴァーデンに運命を
投じるさ」(「33油の行方を追え」とサファイラに告げていたヴァーデンの根
拠地ファーン・ドゥアーに行くのを、マータグがへ三たび拒否する事
実である。最初は「38きらめく墓」で、「ぼくにとってヴァーデンと会う
ことは、帝国のひざ元のウルベーンに丸腰まるこしで入り、ラップのファンファ
ーレで到着とうちやくを知らせるのと同じくらい危険なことだからな」といって断わり、
次には「39ギリエド」で、さらに「46旅路」でヴァーデンのもとには行か
ないと頑なに言う。

おなじことが三度くり返されるのは、物語の常道だけれども、自己保身
のための拒否という情況を踏まえて、わたしはそこにも福音書の伝える一

場面の影が射しているのを、見いださずにはいられない。ひろく知られた
《大祭司の屋敷の中庭なかむら》におけるペトロのイエスとの関係否認のへ三たびが、
ほかならぬそれ。三度目のへ否の直後に鶏鳴を聞き、イエスの予告
を思いだした弟子、自責の念にかられ《外そとに出て、激しく泣いた》福音書
のペトロに代わって、物語では、三度同行を拒んだあとで、「ざっくばら
んに話してくれないか？」とのエラゴンの切なる求めに応えたマータグが
ついに、ヴァーデンのところに行けない本当の理由を明かす、という苦渋
に満ちた決断を、みずからにくだすのである。理由とは、彼の「生まれな
がらの問題」で、ヴァーデンには「ぜったいに」信用してもらえないとこ
ろに在って、その焦点はマータグとはそもそも何者かに絞られてくる。た
だし決断に基づいて「……ぼくに罪があるとしたら、それは最初から……」
「ぼくの父は——」とふるえ声で、いったん口にされかけた告白
〔46旅路〕は、次々と起こる緊急事態、すなわちアーガルの接近、奴隸
商人の騎馬集団の襲撃、ふたたび「アーガルの精鋭部隊」カルの接近など
によって、中断を余儀なくされ、すべてに及ぶのはしばらく先のこととな
る。

そういう経過のあいだに、危険の予想されるへ仲間たちを見捨てるわ
けにはゆかないとの思いがマータグを動かし、「もうヴァーデンのもとへ
むかうしか道が残っていないのか」と、エラゴンにそしておのれ自身
に問わざるをえないところにまで、連れていく。そのときピオア山脈の峯
々のあいだを流れるベアトウース川のほとりにたどり着いていた一行の情
況を、語りに即いて具体的に観ておきたい、——「死にたくないなら、き
みもヴァーデンのもとへ行くしかない」、だから「さけられる危険は、前
もってさけておきたい」(「真相をいつてくれ」と、真剣な口調で迫るエラ

ゴンに対して、「ついにマータグがエラゴンのほうをむいた。追いつめられたオオカミのように、荒くて速い息をしている。一瞬ためらい、それから苦しげな声でいった。「きみには知る権利があるな。ぼくは……ぼくは最初で最後の〈裏切り者たち〉、モーザンの息子だ」(「48谷を飛ぶ」)。場面に強い「衝撃」の波が走って、エラゴンと近くにいるサフィラを打つとともに、それは読者にも伝わって、大きな驚きを抱かせるはずだ。あまりにも思いがけないこの告白、だからこそ物語のはこびに印象的な言葉を耳にしたものは、エラゴン・サフィラをはじめ、誰しも、いったいどうしたことだ、どう対処するべきかと戸惑いを隠せない。上半身をあらわして背中に走る「白い傷」、幼い自分にモーザンが加えた残酷な仕打ちの痕跡を示し、「これだけはわかってほしい。ぼくには、帝国や王を愛する気持ちなんて、これっぽっちもない。やっと手を組んで戦うつもりも、きみを傷つけるつもりもいっさいないんだ」と、必死に訴えるマータグに対して、エラゴンがなお疑念を抱くところに、衝撃の強さのほどが知られよう。

けれども、エラゴンとサフィラが、またマータグが、身に及ぶ危険を排してそれぞれの目的を達するには、やはり〈旅の仲間〉として相手に信をおくことが、どうしても必要となるはずだ。マータグにしても、ヴァーデンのもとでは、最後まできみを擁護すると語ったエラゴンの言葉を、そのままに信じて動く以外に途はあるまい。幸いにして〈仲間〉のあいだに信頼感はとり戻され、一行は、アーガルとカルの執拗な追撃をかわして、コスタ・メルナの湖畔にいたり、追いつがる敵と激しく戦いながら、幅の広い滝をくぐってヴァーデンの根拠地への入口のある崖を目指す。恐ろしい水圧にたえて反対側に出た一行の前に現われたのは、ドワーフと人間たちの集団で、「アカ・グンテラ・ドルシェーダ(いやはや、壮絶な)！ それ

にしても彼らはいったいなを考えているんだ？ もうすこしできみは溺れるところだった！」とエラゴンに声を掛けた、編んだ長い「あごひげ」と「がっちりとした胸」と「たくましい腕」をもった「小男」の方に眼を遣ると、「崖の岩壁」に厚い「石の二枚扉が開かれ」、うす青い光に照らされたトンネルのずつと奥まで続いているのが見えた、という。一方マータグとサフィラをとり囲んだものたちの一人、背の高い、「紫と金色のローブを着た坊主頭の男」が、マータグの腕をおさえ、短剣をのどに擬してエラゴンとサフィラを制圧しつつ、ついてくることを命じる。やむなく二人も黙って「山の内奥に入っ」ていく(「49板ばさみ」)。語りも「だがはたしてこのなかは、外より安全なのだろうか？」と締め括ることく、きびしい迎えられ方で先行きの気になるところだけれども、ともかく目的地ヴァーザン・ドゥアーに到着してエラゴンたちの〈旅〉が終わりを告げたことだけは確かである。

ただ、読者の方はそれで〈旅のあいだ〉の情況の読みを終わりとするわけにはいかない。そこにはなお触れておくべきことがある。後半の旅には、三人のほかにもう一人〈連れ〉がいる、ということ。「彫りの深い、絵のように整った顔。異国的な雰囲気を引き立たせるのは、まるいあごの高い頬骨と長いまつげだ。唯一、その完璧な美しさをそこなうかのように、あごに傷が走っている」と語られる長い黒髪と「とがった耳」をもつエルフの女性の登場がそれなのだが、彼女の場合は、三人とともに旅するというのではなく、意識を失ったままサフィラの背にのせられてはこばれていく点が、他者とは異なる。

「46旅路」の途中で、心の交信を試みたエラゴンの、「エカ・アイ・フリケイ・アン・シャートゥガル(ぼくはライダーで、きみの仲間だ)！」

という懸命な呼び掛けに、眼を閉じて横たわる女性の裡なる警戒心がとけて、彼女は「アーリア」とおのれを名乗り、王側に囚われて薬物を飲まされたので、その作用を緩めるために「みずから昏睡状態に入った」こと、自分の命を救うのに必要な解毒剤「トゥニヴァース・ネクター」はヴァーデンのもとにあることを告げ、「ヴァーデンの地」がどこに在るかを具体的に示したうえで、「ベアトウース河口のコスタ・メルナの湖に着いたら、まず石を拾うこと。それで滝の横にそびえる崖をたたき、さげぶのです——エイ・ヴァーデン・アブラ・ドウ・シャートウガル・ガタ・ヴァンタ（ライダーの長だ、道をあけてほしい）。そうすればなかに入れます」と言うと、ふたたび心をとぎしてしまふ。その指示にしたがった一行がいかなるなりゆきを迎えたかを、先に見届けたわけだが、伯父とへ父の「死への復讐心」に加えて、王の「王政に苦しむ民を助けるという使命感」を抱き、それゆえヴァーデンの在り処を知ることが是非とも必要とするエラゴンは、敵の手からエルフを救い出すとの困難な役割を自身に課した。「今」、そこに到達する道筋を確認できたのである。使命達成への一歩前進といつていい。

それにしても、エラゴンはどうして、エルフ救出を固く決意したのだらう？ もちろんこの高貴な種族がヴァーデンを支援して、ガルバトリックスおよび闇の一味と戦う側にたつことを知っているからであるに違いない。だが、アーリアについては、それだけでは片付かない何かの事情がひそむように思われる。エラゴンが最初に彼女をみたのは、アーガルとの戦いの際に、「棍棒」の直撃をかわし切れず、気を失って捕らえられ、ギリエドの牢獄につながれたときのこと、廊下を通り過ぎる兵士の一団のあいだに、男によってはこばれる「ぐったりとした」その姿を認めた、という。

一団のあとからシェイドが歩いてくるとあるから、この邪悪なもの監視下におかれているに違いない。二人の「出会い」を伝える「40影の死」はじめの一段の示す、女性の顔を眼にしたエラゴンの受けた衝撃とその理由、「彼女こそ、夢のなかに出てきたあの女の人のものだ」は、読者の注意を促さずにはおくまい。続く彼の在り様に触れた一節、「血が熱く燃えはじめていた。自分のなかでなにかが目覚めるのがわかった——これまで一度も感じたことのないなにかだ。強迫観念のようなもの。ただし、もっと激しく、ほとんど狂気に近いもの」、あたかも二人のあいだが深い因縁で結ばれているかのごとき状況を映すこの語りも、読むものの裡になぜ？ との問いを呼びさますのに、やぶさかでない。

エラゴンにとって、アーリアとはいったい「誰」なのか。物語はそうした読者の疑問に対して、決定的な応答を『エラゴン』には提示していないのが心残りだけれども、それをほのめかすでき事は、おのれのはこびに用意しているはずだ。そのひとつが、アーリアと実際に出会う前に、エラゴンは彼女を少くとも二度、「夢」のなかにみていることにはかならない。さらに一度は自身の意志で「見よう」として「透視」を試みてもいる。はじめての夢は「27ある計画」の終わり、ティールム滞在中に現われたのだが、それはアンジェラに「高貴な女性から愛される」と予言されたあとのでき事である点に、注意したい。かつてないほどの「あざやかな夢」——「若い女の人がある。冷たくてかたい檻のなか、鎖でつながれ、悲しげにうずくまっている。壁の高いところに柵のついた窓がある。そこから月明かりがさしこんで、女の人の顔を照らしている。涙がひと筋、頬を伝う。まるでダイヤモンドのしずくのように」と、語りはいう。アンジェラの告げた「あつという間に訪れ」る死が、やがてプロムのそれとなって具現し

たのを想うと、おなじ予言のなかの「高貴な女性」が夢の囚われ人なのだろうか、と誰しも想像するだろう。

「透視」された牢獄の女性は、「ひたとエラゴンを見つめた」(30 映りしもの) という。彼の「見よう」とする意志を感じて、見返したのかと思われる。「37 ライダーの遺産」の終わりに告げられる、「女性になにかよくないことが起きたのだとわかる」夢が、プロムに死なれた日の夜エラゴンに訪れたことも、拷問を受けて苦しむとみえる彼女の、予言の女性とのつながりを推測させよう。夢の牢獄がどこなのかは不明だが、再度の夢のあとしばらく彼女の姿は見えなくなったあげく、ギリエドの獄の廊下をはこばれていくのをエラゴンが目撃するに至ったのである。アリアとのかかわりに触れるいまひとつのでき事にも、言及しておこう。彼女を救出し、目的地へ送り届けてから、そのファーズン・ドゥアーで起きたそれ。「56 試しの儀」で、身心の傷手を癒し、元気をとり戻したアリアは、求めてエラゴンと二人だけのトキをもち、何よりも「あなたは命の恩人、そのことはけっして忘れない」と深く感謝し、自身が序章でシェイドに襲われたエルフにはかならず、「薬を飲まされ、ギリエドに送られ」て、拷問を受けたが、のこっていた魔法の力で必死にわが身を守ってきたことを打ち明けて、エラゴンへの信頼感と親しみをあらわす。アリアからの接近がそこに明らかで、会話はエラゴンにとっても楽しいもののだが、はたして二人のあいだに〈愛〉が動くのかどうかは、まだわからない。

おそらく《ドラゴン・ライダー》三部作の第二部か第三部のどこかで、二人のなりゆきは明らかにされるのだろう。それを愉しみに待つ、読者の首を、あまり長くしないほしい、と作者に希う。

5

必要があつて、旅が終わったあとのでき事のひとつに触れたけれども、一行が目的の地に着いてから何があつたかを、あらためてたずねよう。十章にわたる物語の〈結末〉の舞台、トンネル内を導かれ、行き着いた広間で、双子の兄弟「エグラス・カーン(坊主頭の主)」の拷問にひとしい審査を受け、ドワーフのオリク(先に秘密の入口の前でエラゴンに声を掛けた「小男」のとりなしでそれを切り抜けたエラゴンとマータグ(50 答えをもとめて)を、そしてサフィラを迎え入れたのは、「巨大な火山の噴火口の内部」(51 トロンジヒームの威光)の空間で、火山の名をとって「ファーズン・ドゥアー(わが父)」(同前)と呼ばれ、指導者アジハドの統率する反乱軍ヴァーデンの屯するそこは、もともとドワーフ族の先祖コルガンが見だし、王国を築いたヘドワーフの地にはかならない。以来、現王フロスガアの治世まで連続と続く王国の〈威光〉を、「純白」に輝く「大都市の山」——トロンジヒーム、「みがきあげられた白い大理石は、まるでそこに流しこまれたかのようにみごとな流線型をしている。表面には無数の丸窓があり、窓枠には凝った彫刻がほどこされている。どの窓にも色つきのランタンがさがり、あたりの岩にやわらかな光を落としている。小塔や煙突は見えない。正面の巨大な木の門を、大きな二頭の金のグリフィンが守っている」(51 トロンジヒームの威光)と告げられるそれが、具体的に示す。ドワーフの技術の粋を集めて造られたその〈山〉の地下深くに、フロスガアのいる〈王の間〉があり、なかほどの層にアジハドの居室兼執務室がある、という。

また「トロンジヒームの中央塔」イスダル・ミスラムの最上部に、屋根のない「ドラゴンの間」があって、オリクの説明によると、それは「空にむかって口をあけているんだ。だからサフィラは、上空からじかに飛んでおりてこられる。ライダーたちが滞在するときは、いつもそこを使っているんだ」「ここでは雨や雪の心配はいらんのだ。それに部屋の壁には、大理石の洞穴がずらりとならんでな、そのなかに、ドラゴンが安心して眠るためのものがなんでもそろってる」「53銀の手」という。したがってサフィラは、いわばヘリポートつきの居場所をえて、ファーザン・ドゥアーに落ち着くことができるわけだが、二人の人間はどうだろう。とくにマータグの場合がひどく気になる。魔法の力で強引に意識の内部を探られるという、双子の兄弟の審査を受けた際に、「全身全霊で」抵抗し、見るに見かねたオリクの介入でそれを免れたマータグの、エラゴンたちとともにアシハドに対したときの状況を、たずねてみよう。

「二階建てになった優雅な書斎」「52アシハド」に三人を呼び出したアシハドの「あいさつ」が、まず注意される。「ようこそトロンジヒームへ、エラゴンとサフィラ。わたしはアシハドだ。おかけなさい」というそれは、マータグには向けられていない。ついでマータグをみつめ、「かくし通したい秘密があるというのによくわかる。しかし、そういう態度をとり続けるかぎり、きみを信用するわけにはいかないのだよ」と説く言葉に「挑戦的な口調」で応じるその「声」と、背中の傷痕から、眼前の若者の正体——「裏切り者」モーザンの息子——を認めた指導者は、さらに三度、審査を拒むつもりかどうかを訊ねたあと、「きみが信用できる人間だと証明されたなら、双子がきみの頭からファーザン・ドゥアーの記憶を消し、そののち解放してやる」「さあどうする、マータグ？ きみが決めないなら、

こっちが決めてやるぞ」と、最後の切り札をだすけれども、それに対して、「ぼくの心は、これまでだれにもうばうことのできなかつた聖域だ。ふみこもうとするやつがいても、激しく抵抗してきた。心のなかだけが、唯一安心できる場所だったからだ。この要求だけは、なにがあっても応じられない」という、決然たる言葉が「ゆっくりと明瞭に響いた」のである。そのとき「アシハドの目を敬意の光がよぎった」(傍点引用者)とある語りが、見逃せない。審査を拒否する若者の「真の姿」を、アシハドはそこにみいだしたのだ。

いつでも、どこでも、いかなる場合でも、絶対に他者の意のままにはならない、独立不羈の魂の持ち主、それがマータグのマータグたる所以だ、とわたしも思う。孤児となってガルバトリックスの許で成長した彼は、権力欲にとりつかれた無慈悲な王の素顔に触れて、王宮を棄てて以来、「孤独と悲しみにさいなまれながら」「50答えをもとめて」自己尊重の生き様を身につけてきたに違いない。そのマータグを、アシハドは、エラゴンとサフィラから引き離して、「窓のない部屋」「52アシハド」に入れておく。しかし、いわゆる虜囚の扱いを受けたわけではなく、行動の自由が奪われただけで、待遇はほかと変わらない。やがて面会が許可されて、アリアとの会話を楽しんだエラゴン(「56試しの儀」)が、その足で行ってみると、意外に明るい「仲間」の姿をみいだす。見張りの兵士がすぐに入室を許した「部屋」の情況は——「独房のなかは暖かくて明るかった。すみに洗面器が、もういっぽうのすみに書き物机が置かれ、羽ペンとインクまで用意されている。天井は一面、ウルシ塗りの人物彫刻がほどこされ、床にはぜいたくな敷物がしかかっている。マータグはがんじょうそうなベッドにころがり、巻物を読んでいた」と伝えられ、入ってきた顔をみて「エラゴン！

会いたかったよ！」と「うれしそうにさけ」ぶ「虜囚」の聲が響く。慎重なアジハドの配慮の結果であろう。

いろいろと氣遣うエラゴンに、「見てのとおり、この囚人生活は意外に快適だね。生れて初めて、なににもおびえずに暮らしてる。いや、わかっているさ……でも、こういう場所にいると、気持ちが楽になるんだ」（傍点引用者）と答えるマータグの在り様が、注意されている。傍点の個所に、出自の問題を忘れたわけではないことが示されるけれども、続く「……でも」のものの言いが、微妙な心の動きをうかがわせ、「わざわざべつの隠れ家をさがしに行く理由もないし」との言葉もあつて、どこかに、フアーザン・ドゥアーは自分を受け容れてくれるという安心感の兆している様子が見受けられよう。もちろん身の振り方の結着は、まだついてはいない。としても、ヴァーデンの許を去るか、このままずっと留まるかを決める前に生じた緊急事態、老朽化したトンネルからのアーガル軍の侵入のために、軟禁を解かれ、ヴァーデンやドワーフたちに加わって、敵を迎撃することとなったマータグの在り方は、読者の予測を留まる方に傾けるようだ。戦闘の開始に備えるエラゴンとサフィラとオリクのところ、武装を調べて現われたマータグは、「心配ない。アジハドが解放してくれたんだ」「これは、多くの誠意を証明するいい機会だといわれてね」という（57長き影）。そして激しい戦いに勝ったあと、頭部を負傷した彼は、「もう独房にもどらなくていいのか？」と問うエラゴンに答えて、「今は、だれもそんなことを気にしちやいられないんだ。大勢のヴァーデンとドワーフが命を落としたんだからな。生きのびた者たちも、戦いの疲れから必死で立ち直ろうとしている」と、「真剣な顔」でいう（59嘆きの賢者）。そこに、フアーザン・ドゥアーを守る戦士と自他ともに許す「裏切り者」モーザンの息

子の姿を、わたしはみいだす。

6

最後に、主人公のなりゆきをみつめておかなければならない。サフィラとともに、アジハドに丁寧に迎えられたエラゴンは、マータグが連れ去られたあとの書齋で、請われるままにそれまでのいきさつ、「青い石」＝卵の出現以降のわが身に起きたでき事の、「アンジェラの予言」以外のすべてを、話す。「長い時間」とあるが、無理もない。それは、『エラゴン』の大部分を占める、「01発見」から「49板ばさみ」にいたる物語の、「26魔女とネコ」の章をのぞく「すべて」に相当するのだから。骨占いの示す「世にもめずらしい未来が待」という「予言」は、明かさない方が無難と思われたのだろう。その代わりにエラゴンは、話を聴き終えたアジハドから「自分が尋常ではない立場」に置かれていることを、知らされる。ガルバトリックス一党の人間族とエルフ族とドワーフ族との、長く続く三派鼎立のもたらした緊張状態のなかで、新たに誕生したドラゴンライダーとしての彼の去就が、それぞれの勢力の熱い注目の的になっている、とのこと。だが、闇の生物と手を組んだガルバトリックスの「悪」の脅威が増大してきたいま、情勢は動いて、王に抗するヴァーデンたちとドワーフ族とエルフ族とは、連携して「悪」と戦う姿を見せている。三者を連携の方向に導いたのが、あのプロム、アジハドの「親しい友であるとともに、ヴァーデンの強い味方」で、エラゴンを鍛え、教え、命をかけて守った「父」そのひとにはかならない。それゆえ、「この世を去った今でさえ、彼はわれわれの成功を確実にするものを託してくれた——それがきみだ」とのアジハ

ドの言葉は、プロムの〈遺志を継ぐ者〉という自覚にびたりと重なつて、エラゴンのこれから生きるべき道を、鮮やかに照らしているはずだ。

アジハドから細かな情況説明を受けて、「サフィラの卵を見つけて以来初めて」（傍点引用者）、自身をとりまく「事態」を、「どんな将来が待ち受けているか」を、「はっきり理解できたように」エラゴンは感じた、という。その「理解」を踏まえて、いや、だからこそ、「ぼくは必要なときには戦う。反発すべきときにはそうする。悲しければ嘆くし、そのときが来れば死ぬでしょう……でも意志に反して人に利用されることはぜったいにない」と、あえておのれの本来の在り様を闡明する彼に、アジハドも「きみは自由でなければならぬ。自由であればこそ、真の力が発揮される。きみはどんな王や支配者からも指図を受けず、とるべき道を選ぶことができるんだ。わたしの支配力も、きみに対しては制限を受ける。だが、それでいいのだと思っている」とその姿勢を認めるわけだけでも、《わが父ともいえる男／彼の名が栄光のもとに生き続けること》とプロムの墓碑銘を刻み、「ライダーとして、ガルバトリックスの圧政に苦しむ民を助けるという使命感」に動かされてハダラク沙漠を超えたエラゴンであつてみれば、その自由意志が選ぶ道は、アジハドやヴァーデンたちとともに徹底して〈悪〉と戦うそれ以外には、あり得まい。

はじめに少しく触れたのだが、書齋での対談のなかで、ギリエドにおけるエラゴンのシェイドとの戦い（41戦う影）を話題にした際、敵の正体についてアジハドが語ったところにも、あらためて眼を留めておく。「やつの名前はダーザ——この国にはびこるもつとも邪悪で狡猾な悪魔だ。ガルバトリックスにとっては完璧なる僕であり、われわれにとっては最悪の敵」⁽⁹⁾、そしてマータグが肩と両目のあいだに矢を命中させて殺したとの説

明に、「残念ながら——」「やつは死んではない。シェイドを殺すには、心臓をつきさすしかないんだ。それ以外では、いったん消滅はしても、まだどこかで靈魂となつて現れる。不快きわまりない話だが、ダーザは生きのび、以前よりさらに強力になつてもどつてくるだろう」と明かされるこの恐るべき「悪魔」との対決が、物語の終わりにエラゴンを待つ。それは、アーガルらを含めた「王の軍隊」とヴァーデン・ドワーフ連合軍との、〈ファーザン・ドゥアーの戦い〉における最も重要な局面で、その帰趨は勝敗のゆくえに直接のかかわりをもつ。したがって、二人の対決を伝える「58ファーザン・ドゥアーの戦い」の後半こそ、〈善〉と〈悪〉との対立を踏まえてはこぼれてきた長い物語のクライマックスと、みなされていい。

対決の場に臨むまでにエラゴンはなおいくつかのことに会つた。ティールムの「魔法のネコ」・「魔女で予言者」と再会して、アンジェラからもダーザについての情報、「黒呪術以来、あんな邪悪な魔法をあやつる者はいなかった」「シェイドは霊をあやつるんじゃない。より強い力を発揮するたぬ、霊のほうに自分の体を支配させてしまう。それがシェイドなのよ」をきいたこと（54マンドレークとイモリ）、オリクの案内でドワーフのフロスガー王と会い、「ガルバトリックスのもとから逃げ出せずにいる民を救いたい」と、自身の意図を披瀝して、王から「オソ（信頼）の印」を示され、双子から魔術師の会への参加を求められて、拒否し、ナスアダから「父のアジハド」の「できるだけ早く試験を受けてほしい」との「伝言」を届けられたこと（55山の王の間）、その「試験」すなわち訓練場で行われた〈試しの儀〉で、魔法の力を双子に、剣の腕を傷の癒えたあのエルフの女性、「均整のとれた体を、その美しさに似つかわしくない黒革の衣装で包んでいる」アーリアに、ためされたあと、彼女との話し合いのひとと

きをもったこと（「56試しの儀」）など。ひとつだけ「次の修行に進む」ためにエラゴンはエレスメーラに行かねばならぬと告げるアーリアの言葉を付け加えておきたいが、以上のでき事の経過するあいだ、サフィラが蔭になり日向になって、彼に助言と助力を惜しまないことも、記憶しておこう。

そこで、^{アーシエトラム}「銀の手」——ドラゴン・ライダーの標識である掌の銀の傷痕のゆえに人々から敬意を込めてそう呼ばれる（「53銀の手」）エラゴンの、戦いの日を迎えたときの情況に、眼を向けよう。敵侵入の報告によって作戦会議に参加したエラゴンは、ともにドワーフ製の鎧に身を固めたサフィラと、アジハドの指示した部署について、アーガルの現われるのを待つ（「57長き影」）。続く戦いの章は、「はじまりました」アーリアが悲しげな顔でエラゴンにいった」とはじまる。傍点の語りは、「試しの儀」における一流の剣士のイメジにそぐわない気がするのだが、アーリアの悲しむのは、戦いという殺戮行為そのものなのか、それともエラゴンの身の上なのか。後者であれば、きわめて私的な感情の動きがほのみにえて、興味深い。章の前半に語りは、「ファーザン・ドゥアーの三か所に分かれて」展開する戦況の全体を、テキストで、一〇ページを費やしてうつしだす。そこにはエラゴンとサフィラはもとより、オリク、マータグ、アーリア、フロスガー、アンジェラたちと、「ぼさぼさ髪の少年姿」をとったソレムバンの奮戦ぶりも、忘れられていない。しかし、胸に負傷したサフィラをアーリアとともにヘドラゴンの間に残して、戦いの場にひき返すエラゴンのあとを追う後半で、語りは、彼とダーザとの対決に焦点を絞って、その情況の伝達に終始するのである。

石の「樋」をすべり下りたエラゴンは「中央塔の巨大な広間」に、ひとり立つ。「がらんとしていて、不気味な静寂がひろがっている」その空間

は、戦いのくり広げられている最中に在って、ひどく異様な感じを与えるのだが、だからこそ次に開示される劇的な情況の前提となる、といえよう。「不気味な静寂」はいわば嵐の前の静けさなのだ。そして、どこへ行くべきかと「困惑」してたまたまエラゴンの足許で「爆発音」が起り、床に穴があいて、アーガルたちのあとから「真っ黒な鎧でおおわれた長身の男が現れ」、「エラゴンをまっすぐに見すえた」（傍点引用者）という。続く「ダーザだ」は、一語一文にして、しかも一段落をなす。その独立性は、「現れ」たものの強い確認を示すとともに、前の傍点の語りと相俟つていよいよ直接対決のトキが訪れたことを、告げている。剣と剣で渡り合いながら、エラゴンは必死に相手の意識の壁を突き破って、シェイドの名「ダーザ」の由来を知りけれども、そのダーザの剣に圧倒されて敗北を覚悟した刹那、閃光とともに天井を突き破って、アーリアを背に乗せたサフィラが、「中央塔の真ん中」を「急降下してくる」。ドラゴンのふき出す「あざやかな黄色と、かすかに青がまじる炎」とエルフの掌に輝く「緑色の光輪」が人間に近づいた「その瞬間、エラゴンの体内にかくれていた力、いちばん奥深くからこそげとってきたような力が、いっせいにふきあがって」、「心の防壁をつきやぶり、魔法の力をしっかりとつかむ」（傍点引用者）とあるが、傍点の語はどちらもサフィラとアーリアのそれを指すはずである。〈悪〉に立ち向かう三者の、真実の力の合体が、そこに認められている。対決の帰趨は次のとおり——エラゴンは「あらゆる痛みと怒りを、ひとつの言葉にこめて吐き出した。「ブリジンガー（炎よ）！／＼ザーロソクが真っ赤に燃えあがり、熱のない炎が刀身を走った……／＼エラゴンが剣を前につき出した……／＼そしてダーザの心臓をつらぬいた。「驚愕の顔」で胸の剣をひきぬこうとすることができない邪悪の化身のなりゆきは、次のとおり

——「ダーザの皮膚が透明になった。その下には肉も骨もなく、ただ闇だけが渦巻いている。闇がドクドクと脈を打ち、皮膚を切りさきはじめる」と、ダーザはさらに大きな悲鳴をあげた。最後の絶叫とともに、頭からつま先まで亀裂が走り、そこから闇が逃げていった。闇は三つにわかれ、トロンジヒームの壁の内を飛びまわってから、ファーザン・ドゥアーに飛び出していった。シェイドは消えた」。闇の終焉、〈悪〉の崩壊、シェイド・ダーザの最後の情景は、『シャナラの剣』の《闇の王》ブローナの最後に似ていて、興味深い。「シェイドが消えて」、ファーザン・ドゥアーに平和の回復する日は間近いし、『ドラゴンライダー』の物語空間も、第二部「*Dragon*」が世に出るまでは〈悪〉の脅威にさらされることは、ない。

7

としても、対決に自己の力のすべてを出し尽くして「たおれこんだ」主人公はどうなったかが、気になる。『エラゴン 遺志を継ぐ者』はなお最終の一章をのこして、その次第を明らかにしている。とくに、意識を失って「小さな部屋」にはこぼれたエラゴンの、覚醒するまでの「一日半」の裡なる体験を告げる「59嘆きの賢者」の前半の語りが、注目に価しよう。それは、ほかの誰もあずかり知らない、完全にエラゴンだけのものであって、「むなししい沈黙がただようなか、ブロムの目がエラゴンの目をしっかりと見すえた。その顔にはおだやかな表情がひろがっていた。小さな息が唇のあいだからすつともれた」という、〈父〉の「最期」をみとったときのもそれ（「37ライダーの遺産」）とひとしく、彼の人生に深く刻み込まれた体験であったに違いない。詳しくみてみよう。

はじめのうちしばらくは、「シェイドの記憶の断片が、エラゴンの意識の中をさまよって」、エラゴンを苦しめ、自身が何者なのかを容易に思いださせない。実際には打ち倒したはずなのに、なお記憶のなかにとどまっただけで、彼を攻撃してくる「邪悪な影」の在り様は、恐ろしい。あるいは対決の最中に「シェイドの意識に飛びこみ」、ダーザの名の由来を探った際、みずからも悪霊の〈憑依〉の力に汚染されるところがあったのもあろうか。しかしエラゴンはいま、絶対におのれを失うことはない。「ゆっくりと」自身の記憶をとり戻し、心に射すシェイドの影と「心の外側」＝身体を襲う「痛み」と戦って、〈エラゴン 遺志を継ぐ者〉の姿を、明らかに照らそうとするのだが、そこに「なにかが——いや、だれかが——その痛みを瀬戸ぎわでおしとどめてくれていたようだった」とある語りの一行が、読者の注目を促す。外界に対して閉じられたエラゴンの内部のでき事だから、それはサフィラでもアリアでもマータグでもあり得ない。では「だれ」かといぶかる読者の許に、続いて「わたしのところへ来なさい」とエラゴンに呼びかける声、いや声ならぬ「新たな意識」の囁きが、届く。それに接して「ぱっと飛びのいた」彼は、「目の前にそびえ立つ山のように、広々として強い力をもつ意識。痛みをとめてくれたのは、これだったのだ」と気づき、「音楽」——「威厳と物悲しさを秘めたなが、濃い琥珀色の弦をつまびいているような音」を耳にしなから、手を差しのべてくれた相手に「あなたは……だれですか？」と訊ねる。

わたしも「だれ」かを知りたいけれども、その前に、いまの囁きでエラゴンとは別のことに気づいて「はっと」するので、触れておきたい。おなじ呼びかけを、どこかで聴いている、という記憶が浮かんで、それを手操ると、「マタイによる福音書」の一節に行き着く——〈疲れた者、重荷を

負う者は、だれでもわたしのもとに來なさい。休ませてあげよう》(11・28)⁽¹²⁾ イエスのこの言葉は世の人びとに向けていわれた点だが、物語の囁きとは異なるとしても、労苦を「負う者」を助けようとする心持ちに、変わりはない。すでにプロムの自己犠牲とマータグのファーザン・ドゥアーへの同行否認とに、それぞれ福音書の影を認めたものには、三度目の正直として最終章にもやはりおなじ情況が見いだされるのである。そのように受け留める読者は、おそらくわたし一人ではあるまい。

だれと訊ねたエラゴンの問いに、即時に応じた「助けをあたえるもの」との「言葉ではない一瞬の思考」が、「シェイドの影」を取りはらう。間をおいて「なんとかしておまえを守ろうとしたが、そこはあまりに遠すぎる。わたしには、お前の痛みをとめて正気にもどしてやることしかできなかった」と語りかける意識の主は、再度のだれかとの質問に、こんどは「低く重々しい声」(傍点引用者)で、「わたしはオシヤト・チェトウェイ、すなわちへ嘆きの賢者」。エラゴン、わたしのもとへ来るがいい。わたしはおまえの問いのすべてにこたえられる。わたしを見つかるまで、おまえは安全ではない」と応じて、みずからを明らかにする。イエスのように《休ませてあげよう》とは言わなくても、おなじ思いを彼がエラゴンに抱いていることは、確かであろう。どうやって探したらいいかとときくエラゴンの「絶望的な声」に、「アーリアを信じ、彼女とともにエレズメーラに來なさい——わたしはそこで待っている。もう、何年も待ち続けた。だから早く来るのだ。さまなければ手おくれに……。エラゴン、おまえは自分で思う以上に偉大なのだ。自分の成したことを思い、よろこぶがいい」(傍点ともに引用者)云々と、賢者の声が励ますように響く。傍点の個所に注意すると、チェトウェイは実はそもそもの始まりから、物語空間の外に在

ってずっと事のなりゆきを見守っていたのではないか、と思われてくる。その二人の《対話》が、意識の交信から声と声のやりとりになるのは、それだけ双方のあいだが近づいた証拠だろう。

チェトウェイの言葉に励まされて、自分はいかなる権力者にも左右されない、「なにかもっと大きな者になったのだ」との自覚をもったときの主人公の体験を、語りに即して直接に掲げておこう——、

その結論に達したとき、だれかがうなずいてくれるのを感じた。

「よくわかったようだな」へ嘆きの賢者」が、さっきより近いところで声をかけている。そこから、ひとつの映像が送られてきた——頭の

なかにパッと色がひろがり、それがやがて人の姿になった。かすかに背中を丸め、白い服に身を包み、太陽の光を浴びて崖の上に立つ姿。

「エラゴン、そろそろ休みなさい。目が覚めても、だれにもわたしのことをいってはいけない」人影がやさしくいった。銀色の後光で顔がよく見えない。「よいか、エルフの国にむかうのだ。さあ、もうお休

み……」人影が手をあげた。まるで祝福をあたえられたかのように、エラゴンは体じゅうがおだやかに感じるのを感じた。

意識から声となったへ嘆きの賢者」が、ついにエラゴンの裡に姿を現わす。それを告げるこのくだりを、わたしは、主人公とともに歩む物語の目指す窮極の一節と見做す。出生の秘密を担うエラゴンの本来行き着くべきへところ」が、明らかにそこに啓示されているのを認めるからだ。エルフの国の都エレズメーラへと彼を招くオシヤト・チェトウェイ、心の苦悩を取り去って、大きな安息を彼にもたらすものの示現は、読者の裡にも鮮やかな

印象を刻んで、いつまでも消えない。とともに、「白い服に身を包み、太陽の光を浴びて」輝くそのイメジは、またしてもわたしに、福音書の伝える、《高い山に登られ》、モーセ・エリヤと語ったときの《顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった》というイエスの姿を、想わせずにはおかないことを、つけ加えておく。

「一日半」のちに眼を覚ましたエラゴンは、アンジェラ、アリア、サフィラ、マータグに囲まれながら、「意識を失っていたときに見たものを思い出し」て、当然のことながらひとり心に呟く——「ぼくはかならず行く」。そこで幕を閉じた物語は、このとき、次なる《旅》を行く手に見据えているはずだ。それゆえ、ファーザン・ドウアーはついに主人公の人生の《旅》における一里塚、ということになるのだろう。

〔注〕

- (1) 「14名剣ザロック」で、フロムが「その掌の跡、どうしてついたのか、わしはちゃんと知っておる。ゲドウェイ・イグナシア——光る掌。幼竜をさわったのじゃろう」と、エラゴンにいう。
- (2) 西の海の北部に浮かぶ「巨大な島」。「ライダーの先祖たちの故郷」だが、「今すっかり荒れはて」ている、という。その「中心にあるのが、廃墟と化したドル・アリーバの町」（「28侵入」）。
- (3) 引用は『聖書 新共同訳』（日本聖書協会）に據る。
- (4) アラゲイシアの首都。《旅の仲間》は、ドラス・レオナからギリエドに向かう途中で「首都を大きく迂回して」いく（「39ギリエド」）。
- (5) 「マタイによる福音書」第二章五八節。引用は注(3)におなじ。
- (6) 「マタイによる福音書」第二十六章七五節。引用は注(3)におなじ。

(7) 父と母の死後、ガルバトリックスの許で成長したマータグが、その冷酷無残な性情に気づいて、「王とウルベーンの地から逃げ出す」にいたった次第は、彼自身が「50答えをもとめて」で詳しく語っている。

(8) 「50答えをもとめて」以降のなりゆきは、報告を受けてアジハドも知っているはずである。

(9) 「41戦う影」に、「と、その肩にマータグの矢がつきささり、シェイドは一瞬、おどろきの色を浮かべた。／シェイドは笑いながら、二本の指で矢を引き抜いた。（*中略）次の矢がシェイドの肩間をつらぬいた。彼は顔を手でおおい、苦悶の声をあげてもだえている。皮膚が灰色に変わりはじめていた。まわりに霧がただよい、シェイドの体をおおっていく。耳をつんざくようなさびげがあがった。そして、霧がかき消えた」とある。

(10) もともとモーザンの剣。彼を打ち倒したフロムが手に入れ、旅に出るときエラゴンに譲る。形状は「14名剣ザロック」に詳しい。

(11) テリー・ブルックス作／清水ふみ・森野そら訳、上下二巻、扶桑社（二〇〇四・一一）。

(12) 注(3)におなじ。

(13) 「マタイによる福音書」第十七章一二節。引用は注(3)におなじ。

(えんどう たすく 本学元教授)